

みだれ髪（与謝野晶子）

臙脂紫

この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり表紙画
みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて矢の根
より吹き出でたる花は詩を意味せるなり

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ
歌にきけな誰れ野の花に紅き否むおもむきあるかな春罪もつ
子
髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ
血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめな
椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る
その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな
堂の鐘のひくきゆふべを前髪はたらの桃のつぼみに経たまへ君
紫にもみうらにほふみだれ篋をかくしわづらふ宵の春の神
臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命
紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子眉毛かぼそき
紺青を絹にわが泣く春の暮やまぶきがさね友歌ねびぬ
まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はらから牡丹に名なき
海棠にえうなくときし紅すて夕雨みやる瞳ひとみよたゆき
水にねし嵯峨の大堰のひと夜神紹蚊帳の裾の歌ひめたまへ
春の国恋の御国のあさぼらけしるきは髪か梅花のあぶら
今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾さはりてわが髪ぬれ
ぬ
細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰る夜の
神
清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき
秋の神の御衣より曳く白き虹ものおもふ子の額に消えぬ

経はにがし春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ
山ごもりかくてあれなのみをしへよ紅つくるころ桃の花さか
む

とき髪に室むつまじの百合のかをり消えをあやぶむ夜の
淡紅色よ

雲ぞ青き来し夏姫が朝の髪うつくしいかな水に流るる

夜の神の朝のり帰る羊とらへちさき枕のしたにかくさむ

みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづうみあまりさびしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

許したまへあらずばこそ今のわが身うすむらさきの酒うつ
くしき

わすれがたきとのみに趣味をみとめませ説かじ紫その秋の花

人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴にもたす乱れ乱れ髪

たまくらに鬢のひとすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢

春雨にぬれて君こし草の門よおもはれ顔の海棠の夕

小草いひぬ『酔へる涙の色にさかむそれまで斯くて覚めざれ
な少女』

牧場いでて南にはしる水ながしさても緑の野にふさふ君

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿みならぶ子らよ束の間老い

雨みゆるうき葉しら蓮絵師の君に傘まゐらす三尺の船

御相いとどしたしみやすきなつかしき若葉木立の中の
盧遮那仏

さて責むな高きにのぼり君みずや紅の涙の永劫のあと

春雨にゆふべの宮をまよひ出でし小羊君をのろはしの我れ

ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏をうつくしと見ぬ

みだれごこちまどひごこちぞ頻なる百合ふむ神に乳おほひあ
へず

くれなるの薔薇のかさねの唇に靈の香のなき歌のせますな

旅のやど水に端居の僧の君をいみじと泣きぬ夏の夜の月

春の夜の闇の中くるあまき風しばしかの子が髪に吹かざれ

水に飢えて森をさまよふ小羊のそのまなざしに似たらずや君

誰ぞ夕ひがし生駒の山の上のまよひの雲にこの子うらなへ

悔いますなおさへし袖に折れし剣つひの理想の花に刺あら

じ 額ごしに暁の月みる加茂川の浅水色のみだれ藻染よ

御袖くくりかへりますかの薄闇の欄干夏の加茂川の神

なほ許せ御国遠くば夜の御神紅盃船に送りまゐらせむ

狂ひの子われに焰の翹かるき百二十里あわただしの旅

今ここにかへりみすればわがなさけ闇をおそれぬめしひに似

たり

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひのそれは果してし今

わかき小指胡紛をとくにまどひあり夕ぐれ寒き木蓮の花

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君に歌へな山の鶯

ふしませとその間さがりし春の宵衣桁にかけし御袖かづきぬ

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす

しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたもとの文がらおもき

紫に小草が上へ影おちぬ野の春かぜに髪けづる朝

絵日傘をかなたの岸の草になげわたる小川よ春の水ぬるき

しら壁へ歌ひとつ染めむねがひにて笠はあらざりき二百里の

旅

嵯峨の君を歌に仮せなの朝のすさびすねし鏡のわが夏姿
ふさひ知らぬ新婦かざすしら萩に今宵の神のそと片笑みし
ひと枝の野の梅をらば足りぬべしこれかりそめのかりそめの
別れ

鶯は君が夢よともどきながら緑のとばりそとかかけ見る

紫の紅の滴り花におちて成りしかひなの夢うたがふな

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき
紫の理想の雲はちぎれく仰ぐわが空それはた消えぬ

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬここのなる花の紅ぞ濃
き

神の背にひろきながめをねがはずや今かたかたの袖こむらさ
き

とや心朝の小琴の四つの緒のひとつを永久に神きりすてし

ひく袖に片笑もらす春ぞわかき朝のうしほの恋のたはぶれ
くれの春隣すむ画師うつくしき今朝山吹に声わかかりし

郷人にとなり邸のしら藤の花はとのみに問ひもかねたる
人にそひて密ささぐるこもり妻母なる君を御墓に泣きぬ

なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな

おばしまにおもひはてなき身をもたせ小萩をわたる秋の風見
る

ゆあみして泉を出でしわがはだにふるるはつらき人の世のき
ぬ

売りし琴にむつびの曲をのせしひびき逢魔がどきの黒百合
折れぬ

うすものの二尺のたもとすべりおちて螢ながるる夜風の青き

恋ならぬねざめたたずむ野のひろさ名なし小川のうつくしき
夏

このおもひ何とならむのまどひもちしその昨日すらさびしか
りし我れ

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞろや夜を蝶のねにこ
し

その涙のごふえにしは持たざりきさびしの水に見し二十日月
水十里ゆふべの船をあだにやりて柳による子ぬかうつくしき

(をとめ)

旅の身の大河ひとつまどはむや徐かに日記の里の名けしぬ

(旅びと)

小傘とりて朝の水くみ我とこそ穂麦あをを小雨ふる里

おとに立ちて小川をのぞく乳母が小窓小雨のなかに山吹のち
る

恋か血か牡丹に尽きし春のおもひとのゐの宵のひとり歌なき
長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻となる身の我れぬけ出でし

春三月柱おかぬ琴に音たてぬふれしそぞろの宵の乱れ髪

いづこまで君は帰るとゆふべ野にわが袖ひきぬ翅ある童
ゆふぐれの戸に倚り君がうたふ歌『うき里去りて往きて帰ら
じ』

さびしさに百二十里をそぞろ来ぬと云ふ人あらばあらば如何

ならむ

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿は秋寒かりき

その日より魂にわかれし我れむくろ美しと見ば人にとぶらへ
今の我に歌のありやを問ひますな柱なき織絃これ二十五絃

神のさだめ命のひびき終の我世琴に斧うつ音ききたまへ
人ふたり無才の二字を歌に笑みぬ恋二万年ながき短き

蓮の花船

漕ぎかへる夕船おそき僧の君紅蓮や多きしら蓮や多き
あづまやに水のおときく藤の夕はづしますなのひくき枕よ
御袖ならず御髪のとけときこえたり七尺いづれしら藤の花
夏花のすがたは細きくれなゐに真昼いきむの恋よこの子よ
肩おちて経にゆらぎのそぞろ髪をとめ有心者春の雲こき
とき髪を若枝にからむ風の西よ二尺に足らぬうつくしき虹
うながされて汀の間に車おりぬほの紫の反橋の藤
われとなく梭の手とめし門の唄姉がゑまひの底はづかしき
ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし昨日の無きにしもあ
らず
人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと云ひてかかへてにげ
ぬ
ひとつ篋にひひなをさめて蓋とちて何となき息桃にはばかり
ほの見しは奈良のはづれの若葉宿うすまゆずみのなつかしか
りし
紅に名の知らぬ花さく野の小道いそぎたまふな小傘の一人
くだり船昨夜月かげに歌そめし御堂の壁も見えず見えずなり
ぬ
師の君の目を病みませる庵の庭へうつしまゐらす白菊の花
文字ほそく君が歌ひとつ染めつけぬ玉虫ひめし小笠の蓋に
ゆふぐれを籠へ鳥よぶいもうとの爪先ぬらす海棠の雨
ゆく春をえらびよしある絹袷衣ねびのよそめを一人に問ひぬ

ぬしいはずとれなの筆の水の夕そよ墨足らぬ撫子がさね
母よびてあかつき問ひし君といはれそむくる片頬柳にふれぬ
のろひ歌かきかさねたる反古とりて黒き胡蝶をおさへぬるか
な
額しろき聖よ見ずや夕ぐれを海棠に立つ春夢見姿
笛の音に法華経うつす手をとどめひそめし眉よまだうらわか
き
白檀のけむりこなたへ絶えずあふるにくき扇をうばひぬる
かな

母なるが枕 経よむかたはらのちひさき足をうつくしと見き
わが歌に瞳のいろをうるませしその君去りて十日たちにつ
り
かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあやふくなりにつけるか
な

春の川のりあひ舟のわかき子が昨夜の泊の唄ねたましき
泣かで急げやは手にはばき解くえにしえにし持つ子の夕を待
たむ

燕なく朝をはばきの紐ぞゆるき柳かすむやその家のめぐり
小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿を泣く子朝見し
鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつまじき

道たまゝ蓮月が庵のあとに出でぬ梅に相行く西の京の山
君が前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつな
あるときはねたしと見たる友の髪に香の煙のはひかかるとな
わが春の二十姿と打ぞ見ぬ底くれなゐのうす色牡丹
春はただ盃にこそ注ぐべけれ智慧あり顔の木蓮や花

さはいへど君が昨日の恋がたりひだり枕の切なき夜半よ
人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌か芙蓉といふ文字
琴の上に梅の実おつる宿の昼よちかき清水に歌ずする君
うたたねの君がかたへの旅づつみ恋の詩集の古きあたらしき
戸に倚りて菖蒲売る子がひたひ髪にかかる薄靄にほひある朝
五月雨もむかしに遠き山の庵通夜する人に卯の花いけぬ
四十八寺そのひと寺の鐘なりぬ今し江の北雨雲ひくき
人の子にかせしは罪かわがかひな白きは神になどゆづるべき
ふりかへり許したまへの袖だたみ闇くる風に春ときめきぬ
夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とはで宿とりたまへ
巖をはなれ谿をくだりて躑躅をりて都の絵師と水に別れぬ
春の日を恋に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅の子藤たそがるる
油のあと島田のかたと今日知りし壁に李の花ちりかかる
うなじ手にひくきささやき藤の朝をよしなやこの子行くは旅
の君

まどひなくて経ずする我と見たまふか下品の仏上品の仏
ながしつる四つの笹舟紅梅を載せしがことにおくれて往きぬ
奥の室のうらめづらしき初声に血の気のぼりし面まだ若き
人の歌をくちずさみつつ夕よる柱つめたき秋の雨かな
小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ
かしこしといなみにいひて我とこそその山坂を御手に倚らざ
りし

鳥辺野は御親の御墓あるところ清水坂に歌はなかりき
御親まつる墓のしら梅中に白く熊笹小笹たそがれそめぬ
男きよし載するに僧のうらわかき月にくらしの蓮の花船

経にわかき僧のみこゑの片明^{かたあか}り月の蓮船^{はすふね}兄こぎかへる

浮葉きるとぬれし袂^{あけ}の紅のしづく蓮^{はす}にそそぎてなさけ教へむ

こころみにわかき唇ふれて見れば冷かなるよし蓮の露

明くる夜の河はひろき嵯峨^{さやま}の欄^{らん}きぬ水色の二人^{ふたり}の夏よ

藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら濡^ぬぢぬうすものの袖

牛の子を木かげに立たせ絵にうつす君がゆかたに柿の花ちる

誰が筆に染めし扇ぞ去年^{こぞ}までは白きをめでし君にやはあらぬ

おもぎしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ恋の

神々^{かみがみ}

五月雨に築^{ついち}土くづれし鳥羽^{とば}殿のいぬるの池におもだかさきぬ

つばくらの羽^{はね}にしたたる春雨をうけてなでむかわが朝寝髪

しら菊を折りてゑまひし朝すがた垣間みしつと人の書きこし

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひかばあたへむ三尺の袖

春かぜに桜花^{さくら}ちる層塔^{そうたふ}のゆふべを鳩の羽^はに歌そめむ

憎からぬねたみもつ子とききし子の垣の山吹歌うて過ぎぬ

おばしまのその片袖ぞおもちりし鞍馬を西へ流れにし霞

ひとたびは神より更ににほひ高き朝をつつみし練^{ねり}の下襲^{したかさね}

白百合

月の夜の蓮^{はす}のおばしま君うつくしうら葉の御歌^{みうた}わすれはせず

よ

たけの髪をとめ二人^{ふたり}に月うすき今宵しら蓮色^{はす}まどはずや

よ

荷葉^{はす}なかば誰にゆるすの上^{かみ}の御句^{みく}ぞ御袖^{みそで}片取^{かた}るわかき師の君

おもひおもふ今のこころに分ち分かず君やしら萩われやしろ

百合

百合

いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと御手はなちしは昨日^{きのふ}の夕

三たりをば世にうらぶれしはらからとわれ先づ云ひぬ西の京

の宿

今宵^{こよひ}まくら神にゆづらぬやは手なりたがはせまさじ白百合の

夢

夢にせめてせめてと思ひその神に小百合の露の歌ささやきぬ

次のまのあま戸そとくるわれをよびて秋の夜いかに長きみぢ

かき

友のあしのつめたかりきと旅の朝わかきわが師に心なくいひ

ぬ

ひとまおきてをりをりもれし君がいきその夜しら梅だくと夢

みし

いはず聴かずただうなづきて別れけりその日は六日^{ふたり}二人と

一人

もろ羽かはし掩ひしそれも甲斐なかりきうつくしの友西の京の秋

星となりて逢はむそれまで思ひ出でな一つふすまに聞きし秋の声

人の世に才秀でたるわが友の名の末かなし今日秋くれぬ

星の子のあまりによわし袂あげて魔にも鬼にも勝たむと云へな

百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾ひてだかむ神のこころか

しろ百合はそれその人の高きおもひおもわは艶ふ紅芙蓉とこそ

さはいへどそのひと時よまばゆかりき夏の野しめし白百合の花

友は二十ふたつこしたる我身なりふさはずあらじ恋と伝へむその血潮ふたりは吐かぬちぎりなりき春を山蓼たづねますな

君

秋を三人椎の実なげし鯉やいづこ池の朝かぜ手と手つめたきかの空よ若狭は北よわれ載せて行く雲なきか西の京の山

ひと花はみづから溪にもとめきませ若狭の雪に堪へむ紅

『筆のあとに山居のさまを知りたまへ』人への人の文さりげなき

京はもののつらきところと書きさして見おろしませる加茂の河しろき

恨みまつる湯におりしまの一人居を歌なかりきの君へだてあり

秋の衾あしたわびし身うらめしきつめたきためし春の京に得ぬ

わすれては谿へおりますうしろ影ほそき御肩に春の日よわき京の鐘この日このとき我れあらずこの日このとき人と人を泣きぬ

琵琶の海山ごえ行かむいざと云ひし秋よ三人よ人そぞろなりし

京の水の深み見おろし秋を人の裂きし小指の血のあと寒き山蓼のそれよりふかきくれなゐは梅よはばかれ神にとがおはむ

魔のまへに理想くだきしよわき子と友のゆふべをゆびさしますな

魔のわざを神のさだめと眼を閉ぢし友の片手の花あやぶみぬ

歌をかぞへその子この子にならふなのまだ寸ならぬ白百合の芽よ

はたち妻

露にさめて瞳もたぐる野の色よ夢のただちの紫の虹

やれ壁にチチアンが名はつらかりき湧く酒がめを夕に秘めな
何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびきさとし聖歌のほひ
神にそむきふたたびここに君と見ぬ別れの別れさいへ乱れじ
淵の水になげし聖書を又もひろひ空仰ぎ泣くわれまどひの子
聖書だく子人の御親の墓に伏して弥勒の名をば夕に喚びぬ
神ここに力をわびぬとき紅のほひ興がるめしひの少女
瘦せにたれかひなもる血ぞ猶わかき罪を泣く子と神よ見ます
な

おもはずや夢ねがはずや若人よもゆるくちびる君に映らずや
君さらば巫山の春のひと夜妻またの世までは忘れぬたまへ
あまきにがき味うたがひぬ我を見てわかきひじりの流しにし
涙

歌に名は相問はざりきさいへ一夜ゑにしのほかの一夜とおぼ
すな

水の香をきぬにおほひぬわかき神草には見えぬ風のゆるぎよ
ゆく水のざれ言きかす神の笑まひ御歯あざやかに花の夜あけ
ぬ

百合にやる天の小蝶のみづいろの翅にしつけの糸をとる神
ひとつ血の胸くれなゐの春のいのちひれふすかをり神もとめ
よる

わがいだくおもかげ君はそこに見む春のゆふべの黄雲のちぎ

れ

むねの清水あふれてつひに濁りけり君も罪の子我も罪の子
うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふれて経くづれきぬ
今日を知らず智慧の小石は問はでありき星のおきてと別れに
し朝

春にがき貝多羅葉の名をききて堂の夕日に友の世泣きぬ
ふた月を歌にただある三本樹加茂川千鳥恋はなき子ぞ
わかき子が乳の香まじる春雨に上羽を染めむ白き鳩われ
夕ぐれを花にかくるる小狐のにこ毛にひびく北嵯峨の鐘
見しはそれ緑の夢のほそき夢ゆるせ旅人かたり草なき
胸と胸とおもひことなる松のかぜ友の頬を吹きぬ我頬を吹き

野茨をりて髪にもかざし手にもとり永き日野辺に君まちわび
ぬ

春を説くなその朝かぜにほころびし袂だく子に君こころなき
春をおなじ急瀬さばしる若鮎の釣緒の細緒くれなゐならぬ
みなぞここにけぶる黒髪ぬしや誰れ緋鯉のせなに梅の花ちる
秋を人のよりし柱にとがめあり梅にことかるきぬぎぬの歌
京の山のこぞめしら梅人ふたりおなじ夢みし春と知りたまへ
なつかしの湯の香梅が香山の宿の板戸によりて人まちし闇
詞にも歌にもなさじわがおもひその日そのとき胸より胸に
歌にねて昨夜梶の葉の作者見ぬうつくしかりき黒髪の色
下京や紅屋が門をくぐりたる男かはゆし春の夜の月
枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子われより笑みうつくし
き

しら梅は袖に湯の香は下のきぬにかりそめながら君さらばさ
らば

二十とせの我世の幸はうすかりきせて今見る夢やすかれな
はた
二十とせのうすきいのちのひびきありと浪華の夏の歌に泣き
し君

かつくきぬにその間の床の梅ぞにくき昔がたりを夢に寄する
君

それ終に夢にはあらぬそら語り中のもしびいつ君きえし
なか
君ゆくとその夕ぐれに二人して柱にそめし白萩の歌

なさけあせし文みて病みておとろへてかくても人を猶恋ひわ
たる

夜の神のあととめよるしら綾の鬢の香朝の春雨の宿

その子ここに夕片笑みの二十びと虹のはしらを説くに隠れぬ
ゆふかた
このあした君があげたるみどり子のやがて得む恋うつくしか
れな

恋の神にむくいまつりし今日の歌えにしの神はいつ受けまさ
む

かくてなほあくがれますか真善美わが手の花はくれなるよ君
くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだ
るる

そよ理想おもひにうすき身なればか朝の露草人ねたかりし
りさう
とどめあへぬそぞろ心は人しらむくづれし牡丹さぎぬに紅き
『あらざりき』そは後の人のつづやきし我には永久のうつく
しの夢

行く春の一絃一柱におもひありさいへ火かげのわが髪ながき
ひとをひとち

のらす神あふぎ見るに瞼おもきわが世の闇の夢の小夜中
まふた
そのわかき羊は誰に似たるぞの瞳の御色野は夕なりし
ひとみ

あえかなる白きうすものまなじりの火かげの栄の詛はしき君
はえ
紅梅にそぞろゆきたる京の山叔母の尼すむ寺は訪はざりし
くさぐさの色ある花によそはれし棺のなかの友うつくしき
ひつぎ

五つとせは夢にあらずよみそなはせ春に色なき草ながき里
すげ笠にあるべき歌と強ひゆきぬ若葉よ薫れ生駒葛城
いこまかつらぎ

裾たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の真昼しづけき
まひる

紫のわが世の恋のあさばらけ諸手のかをり追風ながき
もろで
このおもひ真昼の夢と誰か云ふ酒のかをりのなつかしき春
みどりなるは学びの宮とさす神にいらへまつらで摘む夕すみ
れ

そら鳴りの夜ごとのくせぞ狂ほしき汝よ小琴よ片袖かさむ
なれ
(琴に)

ぬしえらばず胸にふれむの行く春の小琴とおぼせ眉やはき君
(琴のいらへて)

去年ゆきし姉の名よびて夕ぐれの戸に立つ人をあはれと思ひ
こぞ
ぬ

十九のわれすでに菫を白く見し水はやつれぬはかなかるべき
つづ
ひと年をこの子のすがた絹に成らず画の筆すてて詩にかへし
君

白きちりぬ紅きくづれぬ床の牡丹五山の僧の口おそろしき
ゆか
今日の身に我をさそひし中の姉小町のはてを祈れと去にぬ
なか
こまち

秋もろし春みじかしをまどひなく説く子ありなば我れ道きか
む

さそひ入れてさらばと我手はらひます御衣のにほひ闇やはら
かき

病みてこもる山の御堂に春くれぬ今日文ながき絵筆とる君

河ぞひの門小雨ふる柳はら二人の一人めす馬しろき

歌は斯くよ血ぞゆらぎしと語る友に笑まひを見せしさびしき
思

とおもへばぞ垣をこえたる山ひとつじとおもへばぞの花よわり
なの

庭下駄に水をあやぶむ花あやめ鉄にたらぬ力をわびぬ

柳ぬれし今朝門すぐる文づかひ青貝ずりのその箱ほそき

『いまさらにそは春せまき御胸なり』われ眼をとぢて御手に
すがりぬ

その友はもだえのはてに歌を見ぬわれを召す神きぬ薄黒き

そのなさけかけますな君罪の子が狂ひのはてを見むと云ひた
まへ

いさめますか道ときますかさとしますか宿世のよそに血を召
しませな

もろかりしはかなかりしと春のうた焚くにこの子の血ぞあま
り若き

夏やせの我やねたみの二十妻里居の夏に京を説く君

こもり居に集の歌ぬくねたみ妻五月のやどの二人うつくしき

舞姫

人に侍る大堰の水のおばしまにわかきうれひの袂の長き

くれなゐの扇に惜しき涙なりき嵯峨のみじか夜晩寒かりし

朝を細き雨に小鼓おほひゆくだんだら染の袖ながき君

人にそひて今日京の子の歌をきく祇園清水春の山まろき

くれなゐの襟にはさめる舞扇酔のすさびのあととめられな

桃われの前髪ゆへるくみ紐やときいろなるがことたらぬかな

浅黄地に扇ながしの都染九尺のしごき袖よりも長き

四条橋おしろいあつき舞姫のぬかささやかに撲つ夕あられ

さしかざす小傘に紅き揚羽蝶小棲とる手に雪ちりかかる

舞姫のかりね姿ようつくしき朝京くだる春の川舟

紅梅に金糸のぬひの菊づくし五枚かさねし襟なつかしき

舞ぎぬの袂に声をおほひけりこのみ闇の春の廻廊

まこと人を打たれむものかふりあげし袂このまま夜をなに舞
はむ

三たび四たびおなじしらべの京の四季おとどの君をつらしと
思ひぬ

あてびとの御膝へおぞやおとしけり行幸源氏の巻絵の小櫛

しろがねの舞の花櫛おもくしてかへす袂のままならぬかな

四とせまへ鼓うつ手にそそがせし涙のぬしに逢はれむ我か

おほつづみ抱へかねたるその頃よ美き衣きるをうれしと思ひ

し

われなれぬ千鳥なく夜の川かぜに鼓拍子をとりに行くまで

春思

いもうとの琴には惜しきおぼろ夜よ京の子こひし鼓のひと手
よそほひし京の子すゑて絹のべて絵の具とく夜を春の雨ふる
そのなさけ今日舞姫に強ひますか西の秀才が眉よやつれし

いとせめてもゆるがままにもえしめよ斯くぞ覚ゆる暮れて行
く春

春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手になぐらせぬ
夜の室に絵の具かぎよる懸想の子太古の神に春似たらずや
そのはてにのこるは何と問ふな説くな友よ歌あれ終の十字架
わかき子が胸の小琴の音を知るや旅ねの君よたまくらかさむ
松かげにまたも相見る君とわれゑにし神をにくしとおぼす
な

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なほ肩に有りとも思
ふ
歌は君酔ひのすさびと墨ひかばさても消ゆべしさても消ぬべ
し

神よとはにわかきまどひのあやまちとこの子の悔ゆる歌きき
ますな

湯あがり御風めすなのわが上衣ゑんじむらさき人うつくし
き

さればとておもにうすぎぬかつきなれず春ゆるしませ中の小
屏風

しら綾に鬢の香しみし夜着の襟そむるに歌のなきにしもあら
ず

夕ぐれの霧のまがひもさとしなりき消えしともしび神うつく
しき

もゆる口になにを含まむぬれといひし人のをゆびの血は涸れ
はてぬ

人の子の恋をもとむる唇に毒ある蜜をわれぬらむ願ひ
ここに三とせ人の名を見ずその詩よまず過すはよわきよわき
心なり

梅の溪の靄くれなゐの朝すがた山うつくしき我れうつくしき
ぬしや誰れねぶの木かげの釣床の網のめもるる水色のきぬ

歌に声のうつくしかりし旅人の行手の村の桃しろかれな
朝の雨につばさしめりし鶯を打たむの袖のさだすぎし君

御手づからの水にうがひしそれよ朝かりし紅筆歌かきてやま

む
春寒のふた日を京の山ごもり梅にふさはぬわが髪 of 乱れ

歌筆を紅にかりたる尖凍てぬ西のみやこの春さむき朝

春の宵をちひさく撞きて鐘を下りぬ二十七段堂のきざはし
手をひたし水は昔にかはらずとさけぶ子の恋われあやぶみぬ
病むわれにその子五つのをととなりつたなの笛をあはれと聞
く夜

とおもひてぬひし春着の袖うらにうらみの歌は書かさせます
な

かくて果つる我世さびしと泣くは誰ぞしろ桔梗さく伽藍のう
らに

人とわれおなじ十九のおもかげをうつせし水よ石津川の流れ

卯の花を小傘にそへて棲とりて五月雨わぶる村はづれかな
おほみあふら

大御油ひひなの殿にまゐらするわが前髪に桃の花ちる

夏花に多くの恋をゆるせしを神悔い泣くか枯野ふく風

道を云はず後を思はず名を問はずここに恋ひ恋ふ君と我と見
る

魔に向ふつるぎの束をにぎるには細き五つの御指と吸ひぬ
消えむものか歌よむ人の夢とそはそは夢ならむさて消えむも
のか

恋と云はじそのまぼろしのあまき夢詩人もありき画だくみも
ありき

君さけぶ道のひかりの遠を見ずやおなじ紅なる靄たちのぼる
かたちの子春の子血の子ほのほの子いまを自在の翹なからず
や

ふとそれより花に色なき春となりぬ疑ひの神まどはしの神

うしや我れさむるさだめの夢を永久にさめなと祈る人の子に
おちぬ

わかき子が髪 of のしづくの草に凝りて蝶とうまれしここ春の国
結願のゆふべの雨に花ぞ黒き五尺こちたき髪かるうなりぬ
罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながくつくられし我れ
そとぬけてその靄おちて人を見ず夕の鐘のかたへさびしき

春の小川うれしの夢に人遠き朝を絵の具の紅き流さむ

もろき虹の七いろ恋ふるちさき者よめでたからずや魔神の
翼

酔に泣くをとめに見ませ春の神男の舌のなにかするどき

その酒の濃きあぢはひを歌ふべき身なり君なり春のおもひ子
花にそむきダビデの歌を誦せむにはあまりに若き我身とぞ思
ふ

みかへりのそれはた更につらかりき闇におぼめく山吹垣根

ゆく水に柳に春ぞなつかしき思はれ人に外ならぬ我れ

その夜かの夜よわきためいきせまりし夜琴にかぞふる三とせは長き

きけな神恋はすみれの紫にゆふべの春の讃嘆のこゑ

病みませるうなじに織きかひな捲きて熱にかわける御口を吸はむ

天の川そひねの床のとばりごしに星のわかれをすかし見るかな

染めてよと君がみもとへおくりやりし扇かへらず風秋となりぬ

たまはりしうす紫の名なし草うすきゆかりを歎きつつ死なむうき身朝をはなれがたなの細柱たまはる梅の歌ことたらぬ

さおぼさずや宵の火かげの長き歌かたみに詞あまり多かりきその歌を誦します声にさめし朝なでよの櫛の人はづかしき

明日を思ひ明日の今おもひ宿の戸に倚る子やよわき梅暮れそめぬ

金色の翅あるわらは躑躅くはへ小舟こぎくるうつくしき川月こよひいたみの眉はてらさざるに琵琶だく人の年とひます

な恋をわれもろしと知りぬ別れかねおさへし袂風の吹きし時

星の世のむくのしらぎぬかばかりに染めしは誰のとがとおぼすぞ

わかき子のこがれよりしは鑿のにほひ美妙の御相けふ身にしみぬ

清し高しさはいへさびし白銀のしろきほのほと人の集見し

(酔茗の君の詩集に)

雁よそよわがさびしきは南なりのこりの恋のよしなき朝夕

来し秋の何に似たるのわが命せましちひさし萩よ紫苑よ

柳あをき堤にいつか立つや我れ水はさばかり流とからず

幸おはせ羽やはらかき鳩とらへ罪ただしたる高き君たち

打ちますにしろがねの鞭うつくし愚かよ泣くか名にうとき羊

誰に似むのおもひ問はれし春ひねもすやは肌もゆる血のけに泣きぬ

庫裏の藤に春ゆく宵のものぐるひ御経のいのちうつつをかしき

春の虹ねりのくけ紐たぐります羞ひ神の暁のかをりよ室の神に御肩かけつつひれふしぬゑんじなればの宵の一襲

天の才ここにほひの美しき春をゆふべに集ゆるさずや消えて凝りて石と成らむの白桔梗秋の野生の趣味さて問ふな

歌の手に葡萄をぬすむ子の髪のやはらかいかな虹のあさあけそと秘めし春のゆふべのちさき夢はぐれさせつる十三絃よ